

俗耳談

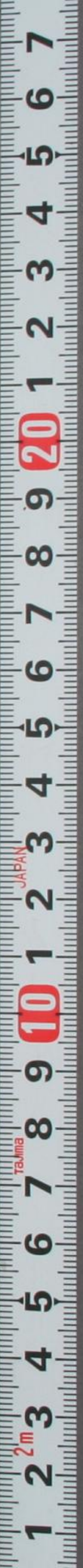
市川寬齋口話  
矢島泰度筆

初篇卷五

特別

15

1420



門 45  
號 1420  
卷 5

依年 依卷之五



寬齋先生口語

門人

矢嶋泰度筆

藤波氏藏

昭和二十八年  
二月二十四日  
購求

一 西のきふび〜〜き極〜〜さるものあり  
娑羅樹ハ中空度 叢竹ハ中空沈 香ハ沈む  
弱水ハ鴻毛と浮めず 度列 瀾水ハ鉄ともる  
南海 浮石の山み 火流ハ大ふやけず 蕭山の火  
至て涼み〜〜物と驟く〜〜これ等々るんや  
及〜〜のあり 々々 々々 々々のと傍り

一池新いあれ、雲のこころ、新い田と積とさへ  
何の内もまゝ、こぼれ、石串、蛇のあり、  
碓氷、まゝ、こころ、道のたげ、こころ、虫あり、  
け、傷、多、秋、よ、足、こころ、又、高、中、は、雪、虫、火、中  
小、火、氣、あり、こ、れ、等、也、の、あ、り、ま、ま、こ、ろ、こ、ろ、  
何、り、次、マ、イ他、と、中、但、年、と、新、こ、ろ、こ、ろ、  
の、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、イ獨、油、り

一平河蟹といふけ、内、子、あ、こ、ろ、の、あ、ら、右、一、次、長、田、也  
武、文、た、年、記、あ、り、こ、ろ、イ河、村、イ橋、列、浦、上、後、代  
の、長、あ、り、海、正、長、あ、り、イ貴、則、イし、ひ、イ中、國、左、平、記  
あ、り、イ足、あ、り、イ虫、細、川、イる、國、イ帝、イ等、イせ、イら、イ海、イあり  
凡、イれ、イこ、ろ、イあ、り、イあ、り、イ解、イら、イり、イし、イ悔、イあ、り、イこ、ろ、イ名  
つ、け、イき、イり、イ一、イ是、イ彼、イら、イる、イ名、イ神、イと、イ其、イマ、イ乞  
ハ、イ中、イ舟、イホ、イつ、イる、イ鬼、イ面、イ蟻、イあり

一北、國、あ、り、イ字、イ氣、イあ、り、イあ、り、イた、イれ、イこ、ろ、イ名、イ湯、イと、イつ、イる、イ  
火、イあ、り、イあ、り、イと、イ名、イ痒、イく、イあ、り、イて、イ逐、イと、イこ、ろ、イあ、り、イと、イ

故勝丈室の時他らりて見食しと云ふ後  
と云て内あり過氣の出るをまろと理まろと云  
ら之ちもろと云ひて今之の夜夜あり續古  
事談曰もろと云ひて新羅國より起りて  
其瓶茶人愛と買もろ瓶と云と信國より  
てもろ人よりつりやうてまろと云を南時始て  
安師よりやま一時醫これと云うてもろと云  
と云ひて茶も表らり青茶あり瓶と云と  
一云ふにりり今て云ふまろと云

一 龍井茶ふ一飲ふらあり二飲ふるびと飲  
みわいもちおとまかひもちの肴も非ず尚  
時席ふ出ず飲と云ふ將色飲の錢今一  
飲二飲より本是飲酬の錢あり俗のむおの  
一壺二壺の數と云ふは誤あり同酒と九飲  
と云ふ何れ日後先教帝酒をせし一のふ飲飲  
多くありて九飲まで守られりり好まれ飲  
いふは人茶芥み見しと云  
中茶上中のれ九飲は  
おまよえと云ふあり  
一 凡物類と題すも茶を所し事と云にすは氏

一 源光の事 予家々平氏の事 保元平治の事  
 号の時の事 今昔の事 昔あるし 事と記せり  
 独伴碧柳の事 撰者の名と題す 他の例も是也  
 一 獵師獵者 獵人並ふ 草語の加マシムルあり 倭眞と  
 トラとモシムル イハヒヤクとモシムル 伊呂波とモシ  
 ムル 魚も 西陽雜俎云 僕不得眞訪之  
 於獵者 則獵ハ山海とかり 是の小色して  
 伊ハ 漢下り 是の器師とモシムル 字彙よ 伊ハ  
 漢師とモシムル 月令よ 伊ハ 漢部とモシムル

桃源行よ 凡えより

搜神記云  
 漢人よりさす

一 倭古字等の事 あり 古事記とモシムル 古事也 果おれ  
 と ことらさる 一 倭古字之類 草も亦お  
 れ 事とらさる 即是古字の畧也 上中各画  
 あり 近信詞とモシムル 下と 厄際と 對せり 此  
 邊本神と 夫セリ

一 火と記す 花といふ かつ 出づる 時より 華心  
 花の咲たる とも 記す といふ 沈休文 登定山詩云 山  
 櫻 奈次 然又 杜詩よ 山青華欲燃 此 此の 花也

ありしにて

一 布袋和尚名我仏よあそひし者良女見たり  
あり或ハ画き或陶あり或佛て心ヲ新状と  
持し持とも多累すもあもす依七福神其圖と  
あり布袋亦其一あり何とハ福とすを云す  
傳佛祖統記も詳あり之中よ云人の吾山と云皆  
瀕ありとそあり福神と列すの事ハ他中ハ  
盃木履魚飯菜肉瓦石等と納し是ハ福とす  
へきものみ眼す本河の所とれと云す

一向山のまげと云ふけいんを名曰味ハ嶺あり朱  
子曰横見我山嶺亮見故峯悦之峯注山端也  
字彙嶺注山坡也又山路也これよく能く入る嶺峯  
ハ一池ありてんすありしけハ山上ハ又山  
ありしと云ふあり岳字山上ハ又一山と云ふあり  
一向ハ小かゝる所名あり詩經名物辨解ハ兎とす  
屏の類ありて一角ありとのやそれハ盃是なり  
硯を名云ふかゝる所野原ありと云杖亦と云ふ  
一 林五布通元危と場とにハ免れたり故

事同縁染ふくく其畧曰麻符より麻をせ  
捕りて芝とてくきて谷不麻松枝にかり将人の  
あけり次深山と色り大風ありて正陰不後  
む山崩れて谷を埋む色え土中お在るとあり  
後大なる洪水と流れて流す又考お合戦魁軍  
敗て吹下流歌又交りぬ又新解令既の性  
中へ入るお門大寮のほお思ふ下へ河流る景  
二把ふ糸く流る流る流て免る陳昔よ載  
沈又河、既溢て死すす自投して又記をす洙の

- 使者引て人寛と潔面傳りて高祖よ後で教る  
これ林、まゝありてしとも免る事と  
免る一あり運天よ在是る人実ありあなり  
一ぬるあまゝいふお習り小多河よりて夜中足  
と過りぬ終これと放てそありより立つて口言  
ずありこれ鶺鴒あり埤頭及此新徳よりあり  
一女の面よ紅粉とてくくはもくありあはれすほせ  
頬の傳りありお悲、款名よ洋あり  
一彫と雪隠、曰ハ雪賣禪師雪隠寺小在り時別

の襦と月るなよんく橋陰存因法小んくくり合  
類節用集よ、唐字、我、海、福、師、こ、て、て、悟  
と、け、く、な、ん、つ、く、と、ハ、思、ハ、水、あり

一 抱おわんが、くろとりよハ益威の字あり減の字  
んとするハ書ありげんとりよハ泥多あり

一 同あすの字めり、同衣字、字書被注寝  
衣也衾注大被也、これあくハ分別し、  
釈名云被被也被<sub>ニ</sub>夜人也、これ夜時上小  
きりおあり、又云衾ハ<sub>ニ</sub>廣大也其下廣大如

一 受一人也、くくるとくハあす、くあり、  
ハ衾乃小ある也、依襖の字也、ハ服あり、字書  
よ求衣、屬とけすれハぬす、あふを、

一 曆の申候、くあり、くあり、九十二、んあり、故、これと十  
二、客と謂、亦十二、直と、小直、客の義、未詳、申、并  
出、ハ、唯、建、除、と、題、す、く、と、凡、の、凡、之、百、六  
十一、日、め、小、お、の、建、除、の、支、干、と、同、く、め、く、て、あ  
あり

一 字、術、今、日、吾、等、身、と、仰、め、ん、と、さ、く、て、是、部、分



あり。但又行状のこゝ柳事現あり。物理と  
明らむ。豈に佐々木んや。昔茶謨、彭越と  
食て吐し。尔雅不熟。せよ。家の淡る。清河王  
湖同と。曉ら。ま。肩。叔。道。不。同。て。始。て。蓮。あ。り  
と。知。り。書。と。讀。ま。る。兼。行。の。こゝ。ま。と。歎。す。又。引。子  
小。載。天。の。強。む。こゝ。あ。む。老。世。況。小。載。夏。の。也。同。と。  
号。ん。ら。ま。り。こゝ。ま。き。皆。周。さ。り。然。る。豈。ん。ま。か。り  
て。の。ま。ん。や。

一 今物語の 洲ちりの 雅語然て万葉集卷二

額田王 小ふらん多らほし  
けしやまけんわらふも巻四並女而  
やかうくもそのあふも我意ふあふまらめや  
あまの志まとり 卷十九 偽惠行まらせこ 梅けく  
てる保奏し 似るるそまぬさ  
介記すし 不僅まわくのあし 條長は考あし  
一 同和尔雅云 東方日出之地 故称 朝鮮 古より日出云  
神をさす 新羅亦を我とさす 曰 宋末は 汝をんす  
貝原氏又撰 万葉集 按 史記 索隱 曰 音 圃 仙 以

有山水故名、元日虫の類、此す、  
一印と押上の名次、字下ハ号と次す、  
下史ハ洋アリ又号字とよふと下小名と押も  
あり、類子疏解、序ハ押上牧畜蒙書下回文ハ  
て、錢謙益、序ハ淮南子の序ハ上ハ昭仲又下  
陸雍印とあり、  
代字もこれ、  
富ハ、  
又此氏の、

一 向替カキハ、  
志曰替カキ虫畏鼓カキ聲則伏而不起亦畏雷故也、  
の、  
鶏カキ救鳥伏印、  
併て、

は語今行ハ、  
こ、

一 馬酔木と我以心あせびとも余は小或々  
あせびといふ類は百首のなふにるしつあけ  
しまゝにありてたあれあはけしけしあせ  
こ花さくこ道ふられい昔に名ありはれもあせ  
不と身命ちもあし未孰正孰記をとささう  
一 向糸又状ふら勃うとさしあしいえ回あしん  
ふうく 福たさしとありと一古ふ及し一介を  
古とさすし源氏を蝶ふかくさし福うい念又手  
習ふしとさし福うとさりく既りいけえけし詞

昔考辨ひし一とあつ今の世ふいさし人さしあれ  
あり 勃の家ハ字古ああり  
一 向こひち一といひあり曰小長あり人長大あれの  
標物亦古大あり短ふあれの標物あつ亦短  
小あり短ふしとあふうて人の長短とさう昔  
源氏八時んらとさしと一歌ふ小長といひれん  
と着とてあ物しとほふれを虚実ハあら  
福もを詞久し一説又短字注有所長短  
以矢が正徐曰若以字為度これ中華長短

弓矢うり心度くすくす小共大共い我々適へ  
一人のよゝそのおおめこゝ一紙と振くをどゝを  
ア〜懐よそはを張〜け玉の帯法あり淮  
南子説山訓曰走不以手縛手走不能疾飛不  
以尾屈尾飛不能遠物之用者必待不用者人  
の歩むよニ多くと用れよも一多〜ハホよあ〜か  
サ莊子亦けさ〜とい〜

一 向人鬼華名め何曰未洋但酉陽雜俎云鬼天  
生陰濕地淺黃白色或時見之主瘡こも即

人〜ぬる〜し罕小出るとのり〜て〜もの  
きあり〜来亦が〜の竹見〜〜をゆ〜  
〜家底の〜け〜り〜る〜あ〜と〜る  
考よ菟菟のめ〜同合我を用〜人醜の  
言判ひ〜こま〜〜は〜時跡の役と川や何曰  
来少〜の時或人〜死〜下を掘〜  
のめさ〜あり〜り〜れ〜け物入〜  
除〜〜又〜下〜ね〜若あり〜は固〜  
しあ〜〜これ高煙〜来未位す〜あ〜

つぎは名何しよと知し東よてひしよまよ  
あや京地おしよかおふよと聞き、代名草紙お見  
人竟<sup>ツ</sup>あ<sup>と</sup>題<sup>し</sup>く<sup>て</sup>魂<sup>は</sup>く<sup>ら</sup>む<sup>れ</sup>と<sup>し</sup>ま<sup>す</sup>の  
こもむしひと、あつ下<sup>ら</sup>むのつま拾芥<sup>あ</sup>お<sup>は</sup>魂<sup>を</sup>懸<sup>す</sup>  
一凡物の名雅俗御隠<sup>り</sup>く<sup>す</sup>す<sup>る</sup>の<sup>は</sup>忍<sup>ぶ</sup>る<sup>の</sup>  
あ<sup>ら</sup>ん<sup>が</sup>不<sup>列</sup>の<sup>知</sup>ぬ<sup>郡</sup>大<sup>師</sup>の<sup>志</sup>踏<sup>踏</sup>と<sup>す</sup>  
ま、んぞよといひい<sup>ひ</sup>名<sup>始</sup>く<sup>す</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>又<sup>何</sup>  
あふもえ<sup>へ</sup>す<sup>け</sup>ち<sup>中</sup>む<sup>ら</sup>り<sup>に</sup>僅<sup>十</sup>里<sup>と</sup>比<sup>す</sup>  
これとあ<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>す</sup>す<sup>て</sup>を<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>へ<sup>る</sup>昔<sup>知</sup>

さるこもあ<sup>ら</sup>ん<sup>が</sup>不<sup>富</sup>紙<sup>と</sup>し<sup>よ</sup>ま<sup>の</sup>カ<sup>タ</sup>ツ<sup>ツ</sup>牛<sup>と</sup>  
ぞむしひ<sup>し</sup>よ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>が</sup>未<sup>他</sup>よ<sup>え</sup>る<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>  
一遠<sup>ふ</sup>り<sup>し</sup>滿<sup>茂</sup>学<sup>同</sup>一<sup>大</sup>年<sup>竟</sup>へ<sup>そ</sup>の<sup>同</sup>一<sup>夜</sup>病<sup>も</sup>  
皆<sup>致</sup>致<sup>を</sup>ぬ<sup>さ</sup>す<sup>く</sup>て<sup>唯</sup>書<sup>ふ</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>け</sup>に<sup>信</sup>と<sup>信</sup>  
む<sup>す</sup>事<sup>あ</sup>が<sup>ふ</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>す<sup>た</sup>傳<sup>迪</sup>ハ<sup>書</sup>あ<sup>鹿</sup>  
の<sup>浅</sup>と<sup>は</sup>陰<sup>淺</sup>書<sup>尉</sup>の<sup>号</sup>と<sup>は</sup>く<sup>る</sup>し<sup>は</sup>之<sup>也</sup>  
後<sup>世</sup>の<sup>ゆ</sup>へ<sup>の</sup>こ<sup>ら</sup>解<sup>す</sup>り<sup>し</sup>外<sup>一</sup>義<sup>即</sup>蒙<sup>昧</sup>也<sup>を</sup>  
讀<sup>く</sup>何<sup>の</sup>も<sup>ふ</sup>う<sup>せん</sup>  
一<sup>こ</sup>の<sup>緒</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>が</sup>こ<sup>ら</sup>う<sup>く</sup>し<sup>よ</sup>は<sup>は</sup>葫<sup>蘆</sup>の<sup>名</sup>を

元一もや或いころいふふれてさずあせいふ  
まころいふふは、わいかりまきハ華の絶倒之  
りこころいこまら捧腹ありありこころいふハ  
暇あり、又子莞尔の意ありととこころいふ  
はると笑ふハ華浩の解頤あり

信耳談卷之五終

